

〇こまちなみシリーズ⑧

西条の酒蔵通り

中国セントラルコンサルタント 桧山渉

JR西条駅の南側、線路と平行して東西にのびる街道が、酒蔵通りである。看板代わりの赤い煉瓦煙突や、白い漆喰と黒い海鼠壁とのコントラストが美しい土蔵造りの酒蔵群が残っている。

東広島市西条は、灘・伏見と並び称される日本有数の酒処である。酒蔵通りには7社の蔵元が立ち並び、酒造りの季節になるとほのかな日本酒の香りにつつまれる。

ここは、江戸時代に西条四日市と呼ばれた宿場町で、街道沿いに大きな商家や旅籠が並び、酒造りが始まった。今では四日市という地名は馴染みがないが、明治中頃までの「四日市次郎丸村」に由来している。その頃から「西条」と名を変えて、鉄道を引き込み、駅をつくり、これを機に街道沿いで酒造りが盛んになったといわれている。

現在、酒蔵通りでは、ボランティアガイドによるまち歩きや、県内の大学による、酒造りの街を舞台に美術を通して盛り上げるアートイベントなど様々な活動が行われている。また酒都西条として、酒蔵通りを活用してだけでなく、西条酒（さいじょうさけ）の認定（西条産地呼称清酒認定制度）や、東広島市日本酒の普及の促進に関する条例の施行（乾杯条例）など、西条の酒蔵・酒を主とした動きが展開されている。

そのなかでも最も大きなものが毎年10月上旬に行われる酒祭りである。2日間で20万人を超える人出でにぎわい、千銘柄の地酒が試飲できる広場や、各蔵元では趣向を凝らした酒蔵イベントが催される。そのため、酒好きの人はもちろん、酒の飲めない人、家族連れ、幅広い層が楽しめるものとなっている。また、酒蔵通りにある店舗や民家のなかには、祭りに併せて、出店したり、フリーマーケットを行う人もいる。

一方で課題もある。JR西条駅周辺約700～800mの酒蔵通りが会場となっており、この会場に一日約12万人の来場者が集中する現況への対応策が一番の課題である。例えば、トイレの不足、泥酔者対策、廃棄物処理対策などである。特に会場近隣の住民の中には、上記の問題等で、祭り期間中は西条から離れるという人もいる。

祭りの規模が大きくなる一方で、東広島市では2009年（千代の春酒造・志和町）、2014年（賀茂輝酒造・西条町）とすでに2つの蔵元が廃業となっている。現存する7つの蔵元の並ぶ酒蔵通り、その蔵元が造る西条酒などの地域資源を活かし、今後のまちづくりを展開していくためには、祭りの来場者だけでなく、酒祭り会場近隣の住民への配慮の検討も、非常に重要だと考える。

地元住民の一人として、これからも地元に愛され誇りとされる酒蔵通り、酒祭りであり続けてほしいと願う。



亀齢酒造正面(酒蔵通り)



ART in 酒蔵ポスター

〇こまちなみシリーズ⑨

三次・小路巡り

晩秋から初冬にかけて三次は濃い霧に包まれる。

広島から松江方面につながる国道54号線傍、三次市栗屋町の高谷山(標高490m)に登り展望台に立つと、日の出とともに眼前に瀬戸内の多島海美を思わせるような「霧の海」が広がる。

三次は江の川(可愛川)、西城川、馬洗川の合流点、三つの川は江川(ごうのかわ)となり島根県江津市まで流れゆく。私は霧の海を暫し愛でた後、山を下りて祝橋を渡り三次町へ。

三次のメインストリートは巴橋西詰の住吉神社から恵比須神社までの本通り。かつては銀行、郵便局、薬問屋、造り酒屋、農機具店、衣料品店などの老舗、大店が軒を並べ、11月の胡子講には農閑期に入った近郷近在の人たちが多くやってきて賑わいをみせたものだった。このメイン道路から西は中通へ、東は旭町に通じ抜けできる「小路」が幾本もある。

「小路」、「こみち」ではなく「しょうじ」と読む。この小路は江戸期の浅野藩時代から多くつくられている。小路は生産、生活道であるだけでなく、火事の際延焼を防ぐ防火の役割もあった。また必ず側溝が設けられており生活排水路の役割も担った。

小路にはすべて名前が付いている。それは〇〇へ通じていることを示すもの、あるいは大店の名前を付けたものなどである。時代とともに片側の家並がなくなったもの、区画整理で完全に姿を消したものもあるが、いくつかをブラリ歩いてみよう。

前田小路は本通りから三次小学校方面に取り抜けできる。町内屈指の資産家、前田万助の土地や家作があったのに因んでつけられたもの。幼少期、友人の家もあった。本通り側の入り口のところで、両側の民家が上でつながりトンネル状になった珍しい小路。

1972年7月、梅雨末期の集中豪雨で三次の市街地はほとんど水に浸かった。西城川が氾濫、旭町の堤防を越え本通りなどへ流れ込んだのだ。この水害をきっかけに旭町の上の段(堤防部分)の古い家並はすべて移転を余儀なくされ、堤防の嵩上げが行われた。かつて私の家も上の段にあり、石段を降り、畠中小路を通過して本通りに抜けることができた。実は小さいころは「〇〇さんのところのショージ」と言っていたので、今回、現地に立つ石柱で「畠中小路」であることを初めて知った。なんでも江戸期のころはこの周りに畑地があったのでつけられたとか…。

このほか「魚の棚小路(うおのたなしょうじ)」は江戸期に魚問屋があったところ、昭和40年ころまで魚屋、仕出し屋、豆腐屋、床屋、食堂などがあり盛り場的な通りだった。いまも2、3軒小料理屋がある。伊予屋小路は伊予屋という海産物問屋があったところ。「マンコショージ、マンコショージ」言っていて、なんと卑猥な名前の小路があるもんだとてつきり今の今まで思っていたところは「万光小路(まんこうしょうじ)」、万光院というお寺に通じていたが、今やそのお寺はなく名前だけ残っている。



前田小路



小路



旧三次郵便局

恵比須神社からさらに北へ太歳神社の間にも小路があり、合わせて13か所。

本通りには本卯建の上がる旧増田酒店など古い建物や旧三次郵便局(現市立歴史民俗資料館)、旧広島銀行三次支店の洋風建築などがあり、わずか700m足らずの通りをそぞろ歩くと、半世紀以上前の賑わいを見せた街並みが蘇ってくる。

(編集委員 三宅恭次)

第22号(平成28年3月15日)

〇こまちなみシリーズ⑩

卯建(うだつ)のあるまち・玖波(大竹市)

江戸時代、安芸国の最西端の宿場として玖波村は栄えた。しかし、慶応2年(1866)、幕府軍を追撃する長州軍によって、大竹・小方そして玖波宿の殆どが焼き払われた。(第二次長州戦争)明治半ばに入り、漁業の町として、玖波谷・廿日市市からの物資の交流拠点として、海外移民者の支援などにより新たな町並みがよみがえった。

● 「馬ためしの峠」

巖島の西端を望み、大野・鳴川海岸沿いに国道2号を下る。目の前に明治12年(1879)に完成した旧国道の玖波隧道(トンネル)の入り口が見えてくる。この隧道の上を越える峠が「馬ためしの峠」と呼ばれ、トンネルが出来るまで険しい峠を越えていた。静かなトンネルを抜けると直ぐに玖波の町並みに入る。海沿いの国道2号に並行して300m家屋が立ち並ぶ。



玖波隧道、左は国道2号

● 「玖波宿うだつストリート」

現在の町並みは明治以降、長州戦争の後に再建された。白壁や格子戸だけでなく卯建を設けた家屋が多く、大火災の体験による知恵と言われている。最近は次々と洋風の家屋に建て替わっているが、卯建を構えた建物が30棟弱あり、江戸時代の宿場の雰囲気が漂い、往時を偲ばせる。この町並みは2年前、地域住民によって「玖波宿うだつストリート」と命名された。そして「まちカフェ」がオープンし、多くの手づくり市民イベントも開催されるようになった。



玖波宿の町並み

正面は馬ためしの峠

● 玖波の本陣「洪量館」(こうりょうかん)

玖波宿の本陣(大名や役人の宿)は街道筋に面し、屋敷の奥は現在の国道2号まであり、その先は海になっていた。

巖島を望む風光明媚な海辺にあり、海水を満々と湛えた海の様子から「洪量館」と名付けられた。本陣から望む瀬戸内の素晴らしさは諸国に聞こえ、文人墨客の集まる所ともなっていたが、長州戦争により全てを消失し、再建されることはなかった。

● 高札場(こうさつば)と角屋釣井(かどやつるい)

本陣の50m東に胡子神社がある。この場所に高札場(告知文の掲示場所)が設けられていた。そばに御影石の切り石で囲まれ、「角屋釣井」と呼ばれる井戸がある。海の近くであるが、豊かな真水があふれ、宿場の共同井戸の一つとして利用されていた。今でも手押しポンプでくむと冷たい真水がくみ出されるが、飲料には適さなくなっている。



高札場跡と角屋釣井

● 第67回優良公民館表彰「全国一」の玖波公民館

昨年3月、文部科学省の公民館表彰で全国最優秀館に選ばれた。同館は5年前、地域住民が学習と交流を深める講座「学びのカフェ」をスタート。参加者を「地域ジン」と呼び、地区が一体となってまちづくりを進めている点が評価された。受賞直後から全国からの視察や講演依頼が相次いでいる。同館は一人だけの常駐職員（河内ひとみさん）が切り盛り。これまで築き上げた地域の大きく太いネットワークが支える。

私が訪ねたのは今年の2月はじめ。大変多忙な中、私の質問に丁寧に答えてもらった。今後の「地域ジン・学びのカフェ」の盛り上がりに興味深く楽しみだ。河内さんは「まちが変わるのは人づくりから」「人が輝けば地域も輝く」とキッパリ。

町並み探索と合わせて貴重な収穫であった。



中国新聞（今年2月5日付）

(アクセス)

車の場合は、駐車場がないので公民館駐車場の利用許可を得ることをお勧め。館内に町並みパネル展示や「うだつストリートマップ」（無料）がある。公民館から、又はJR玖波駅から町並みまで、いずれも徒歩3分。（大竹市・玖波公民館 0827-57-7084）

参考文献：「西国街道を歩く 安芸・備後路」（西国街道ぶらり旅の会発行、2010）ほか
掲載写真：筆者撮影（28年2月5日）

（編集委員 高東博視）

第23号（平成28年5月15日）

○こまちなみシリーズ⑩

備後府中の銀の道・出口通り

三月某日、「そうだ上下に行かなくちゃ」と思い立って、横川から広島、新幹線で福山へ。前の編集会議で自ら「上下を書きますよ」と言ったことを思い出し、列車に飛び乗ったのでした。上下は平成の大合併で甲奴郡から府中市に編入されています。福山から福塩線に乗り40分で府中へ、神辺、戸手…窓外の桜を愛でながら…11時57分着。府中からの接続も30分待ちで三次行きがある、と思いついていたのでした。と、どうもおかしいので駅員に聞くと「ああ、あれは決められた日しか運行しません。今日の三次方面行きは3時5分です」「エツ!」、絶句、絶句でした。ともかく駅を出よう。駅前には「銀座通り」があるが、店らしい店もなく人通りもない。



案内図



府中というと明治の料亭旅館をリニューアルした「恋しき」なるものがあることを思い出した。「そうだ、そこへ行ってみよう」、歩くこと10分、府中の観光情報発信拠点「府中市地域交流センター」の傍にありました。中に入り「予約していないのですが?」「良いですよ、どうぞ、どうぞ」、ここでランチを取ることにしました。テーブルにいろいろパンフレットが

置いてあり、中に「石州街道 出口通り」、直感が働きました！今日は上下を止めて、ここ、ここ。注文を取りに来た若い子に「ここは近いの？」「さあ？」、膳を持ってきた年配の女性が「ええ、ここを出て右手を真っ直ぐ行くと突き当りです、結構歩きますよ」。

まさに車も通れないくらいの小路、歩くこと10数分で突き当り、右へ行くか左か、まあ左方向へ下ろう。下り切ったところに古民家を改装したお好み焼き屋がある。覗いて「これが出口通りですか？」「そう、銀の道」。

案内図を広げてみると、駅の北西部が古い家並が残る、かつて備後国の国府が置かれた古都、府中のような。その中で石見銀山から尾道、笠岡の二つのルートに続く銀山街道の一部を成す出口通り、私はぶらりぶらりと緩やかな上り路を歩いた。江戸期、その間400mに並ぶ家々はほとんど商家だったとのこと。七尺道と呼ばれた道幅約2mの両側に往時の繁栄ぶりを偲ばせる邸宅が10軒近く残っています。間口の広い平入り、むくり屋根、うだつ、虫籠窓、繊細な格子など等…。通りの中ほどに立派な山門のお寺「慶照寺」があります。明治期から昭和初期には一と六の付く日に門前に市が立ちにぎわったそうです。さらに歩くと出口通りの起点に着きます。そこには「旧石州街道、左方向が出口通り、右が上下(坂根峠越え)」の看板。三室橋を渡るとすぐ急な山道に入り、厳しい峠越えをして上下に至ります。

出口通りの由来は石見⇒上下方面から銀を運ぶ人馬がやっと山道を抜けたところ、眼前に開ける平地をみて「出口」と呼ばれるようになったそうです。

府中といえば上場企業や繊維産業が立地する産業都市のイメージが強いです。そのためか、地元ではこれまで歴史のある建造物等に関心が薄かったそうですが、国土交通省中国地方整備局が歴史や文化を今に伝える中国地方の街道を「夢街道ルネサンス認定地区」にすることになり、出口通りが平成17年に認定を受けました。これを機に地元「石州街道出口地区まちづくり協議会」ができ、祭りやイベントなどを企画、街並み保存に尽力しています。

銀の道ということで次回以降、上下、吉舎、三良坂、布野などをこの「こまちなみシリーズ」で取り上げていきたいものです。
(編集委員 三宅恭次)

